

最適な国際生産分業を目指し続ける 調整の仕組みに関する研究

地域共創学部
地域づくり学科
教授

横井 克典



研究シーズの紹介

近年、多くの日本企業が複数の国・地域に拠点を設立し、ビジネスを展開している。自社の拠点配置が多様化すればするほど、何を、どの拠点で生産し、どの市場に供給するのかという選択肢が増加することになる。同時にそれは、自社にとって望ましい国際生産分業のあり方をいかに形づくるのがますます問われるようになったことを意味する。

しかし、これは極めて困難な問題である。時間の経過に伴

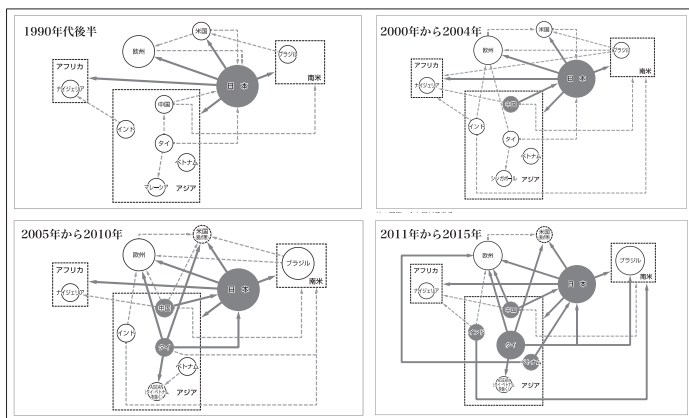
う市場の変化、そして、それが促す拠点の成長という連鎖によって、最適な国際生産分業のあり方は変わっていくからである。

本研究では、日本二輪車企業を事例として、企業が最適な国際生産分業を目指し続けていく過程と、それを実現するための組織内部の意思決定の仕組みの解明に取り組んでいる。



国際生産分業を調整する 仕組みの社内整備

- 最適な国際生産分業の形成は、長期にわたって遂行するプロセスと捉えることが重要です。そして、この営みを続けていく中では、自社の将来構想が有する長期的な視点を確保しながら、各国・地域の市場・拠点の変化に応じていくための仕組みを社内に整えることが求められます。



左図は、本田技研工業（二輪事業）の国際生産分業の形成プロセスです。

同社は、国際生産分業の調整の仕組みのもとで、その時々状況と構想をアップデートし、長期的に最適な形を追求してきました。

期待される活用シーン

- 海外拠点の役割が重複している、拠点間の連携が取れていない。
- 現地（海外）でのビジネスのスピードが早すぎて、海外拠点の内実をつかみにくくなってきた。



海外拠点と本社への聞き取りをもとに、原因を考えることができます。

- 本社・海外拠点ともに日々のビジネスが忙しく、自社の海外ビジネスの全体像が不鮮明になってきた。



海外拠点と本社への聞き取りをもとに全体像を整理し、フィードバックできます。

